

最優秀賞

香川県

国立大学法人香川大学教育学部附属高松中学校 二年 西川 倫 弘

ぼくの街の消防団員

平成二十一年七月二十一日、西日本を豪雨が襲い、山口県の特別養護老人ホームが土砂災害にあり、入居していた六十才から九十才までの十四名が亡くなるという悲惨な出来事が起きました。ぼくは、この様子をテレビのニュースで見っていました。老人ホーム一階は全て泥に埋まり、泥は二階までも及んでいます。その泥を手作業でかき出し、救助活動をしている自衛隊員と消防員と消防団員を見ました。まだ降り続く雨の中、二次災害も予想される中での大変な救助活動です。「人を助けたい」という強い気持ちがあればできないことだと思いました。

ぼくの父は、地区の消防団員をしています。ぼくが物心ついた時には、もう地区の消防団員に入っていたので、どうして父が入ったのか聞くことすら思いませんでした。

父の仕事は、トラックのボディを作ったり、トラックを修理することです。自宅近隣の工場です。しかし、昼間、屯所のサイレンが鳴ると仕事の手を離れる時は屯所に駆けつけ、状況によってはポンプ車で出勤します。夜中寝ている時でも屯所のサイレンが鳴ると、やはり駆けつけます。ぼくが寝ている間のことなので、翌朝父や母から聞いて驚くことが多いです。

高松が平成十六年の台風災害で、多くの家が床上浸水にあったことは、ぼくも憶えています。あの時も父は、仕事を従業員さんをお願いし、自分は丸々二日間、消防団員として水に浸かった家の畳やテレビなど家財道具をゴミ収集場まで運びました。「水を吸った畳はものすごく重いぞ」と父が言っていました。その後も昼間は自分の仕事をし、夕方から消防団員で災害地の片付けをしていた父のしんどさは、大変なものだったと思います。

台風などで高松市に警報が出ると、父たち消防団員は屯所で待機します。そして浸水の恐れのある家々に土のうを運び積んでいきます。以前一度だけ父は危ない思いをしたそうです。雨水で道路と溝の区別がなくなった所で土のうを積む作業をしている時、誤って溝に落ち込んでしまったそうです。

ぼくは父に聞いてみました。なぜ消防団に入ったのか。しんどい思いばかりなのに。

平成七年一月阪神淡路大震災の時、父は初めてボランティアで現地へ行き、うどんの炊き出しをしたそうです。災害地の神戸は焼け焦げた臭いがし、一瞬で家を無くした人たちであふれていたそうです。父がうどんを配ると、皆さんは笑顔で「ありがとう」と言ってくれたそうです。人間は一人では生きていけない、助け合って支え合っていくものだと思えたそうです。そして父は、大きいことはできないが、今の自分にできることとして地区の消防団に入ったそうです。

その話をする父が、とても大きく見えました。支え合うことの意味を少し分かった気がします。ぼくの街の消防団員は立派な人です。